時に研究室内の人となつて「アルバイト」に從事し基礎醫學者以上の業績を出してゐるものもある。

現代醫界の風潮を觀るに、臨牀醫家の業績に於ても、病理、細菌、又たは醫化學に關した者でなければ價値なき者の如くに思はれ、症候學的の報告や論文の如きは殆んど學問上の價値なきものゝ樣に看做するに至つた、ことに學位請求論文が、基礎醫學的の研究に基いた者でなければならぬ樣になり、博士になるのはドーシテも病理や細菌學や醫化學やらを土臺にした研究を試まねばならぬことになつたから、一層臨牀的の觀察や研究が其の價値を減少する次第となつのは蓋し自然の趨勢である、此の如き次第である故臨牀醫科を專門にしてゐながら實際上の技能手腕よりも寧ろ學理的研究の方面に長じ、所謂『學醫匙まはらず』てふ俚諺その儘の人物が隨分多く出づるようになつてきた。

此の如き風潮は果たして醫界全體の爲めに喜ぶべき現象であらうか、固とより醫學其者の進歩發達の上より觀れば、臨牀醫家が基礎醫學者と相對して純正學理の研究に從事するのも決して非難すべきことでなく、寧ろ雙手を擧げて歡迎すべき次第であるが、併し、匙のまわらぬ學醫の澤山あらはれてくるのは、誠に厭ふべき現象である

と謂はねばならぬ。

一身にして醫學者と良醫とを兼ねてゐる人も少くはないが、併し、現代の風潮より推して考へてみると、學醫の方が漸次多くなつて良醫は次第に其影を沒するが如き傾向が見ゆるようである、病理及び細菌學學等に關する純正學理上の論文で學位を獲た人が、診療上の技能手腕に至ては遙るかに平凡なる町醫者よりも劣てゐるに拘はらず、急に大家に成り濟まして門戸を張り博士の肩書を振りまはして患者の吸收策を講じてゐるが如きは實に滑稽の極ではないか、現に自分の知れる內科專門の某博士の如きは細菌學には多少通曉してゐるようであるが實際上の手腕に至ては頗る恠やしいもので、どても貴重の生命を託すべき先生ではないのである。

元來基礎醫學的研究業績のみに重要の價値を置いて臨牀上の業績を疎んずる現代の風潮が間違てゐる、顯微鏡、白金線、試驗管、動物試驗等に關係ある「アルバイト」でなければ眞の「アルバイト」に非ずと看做してゐるのは純正學問の進歩に取ては、誠に慶賀すべき趨勢ではあるが、併し之が爲めに醫學究極の目的たる實際的診療の道を忽緒に附せしめ煩瑣なる學理に通じてゐても、碌に病人の脈をも按ずることの出來ない學醫を輩出せしむるの動機となりはせまいか。

臨牀的症候學上の實驗觀察も決して疎外すべきものでなく、假令氣管枝加答兒や神經痛等の如き平凡極まる疾病と雖、綿密精緻に其の症候を觀察研究し、多數の材料に就て比較類蒐したならば、必ずや立派なる業績の擧るべき譯である、夫れ道は近きにあり然るに之を遠きに求むるとやらで、平素容易に實驗研究し得べき貴重なる多數の臨牀的材料が眼前に横つてゐるに拘はらず、煩瑣迂遠の「アルバイト」の製作を得意として「アミロイド」がドウの「リボイド」がドウのと、自分の專門とする實地上の領域には深大の關係もなき研究に腐心し、學者は此の如き者にて候と言はぬばかりに揚々得意顏になりすまし而かも診療の技能手腕が却て自己の侮蔑せる町醫者よりも拙劣であるようでは、學理研究に偏するの餘弊何ぞ一に此に至るやと言ひたくなるではないか。

自分の畏敬せる先輩菅井竹吉博士は『余が二十年間の實驗と研究』と題せる浩瀚の著書を草し近日吐鳳堂より出版せしむることゝなつたが、此の書物は菅井君が主として多年の臨牀的實驗研究を類聚したもので、毫も歐洲諸學者の糟粕を嘗めず自己獨得の觀察の結果を發表したもので、當世流行の動物試驗や醫化學上の研究等とは緣の遠いものであるが、所說は斬新卓拔先人未發の創見も鮮くないようである、自分は

菅井君の此著書を以て、顯微鏡、白金線、試驗管、動物試驗等に基いた研究でなければ眞の「アルバイト」に非ずと傲語してゐる學醫先生の机邊に提供し平素彼等の輕視せる症候學的研究も觀察の仕方に依ては此の如く堂々たるもので煩瑣なる當世流行の研究業績に比して數十倍以上の價値のあることを示してみたいと思ふ。

噫『醫學者必ずしも良醫にあらず』、自分は固とより醫學者を尊敬することに至ては人後に落つるものではないが、併し、貴重なる生命は匙のまはらぬ學醫よりも寧ろ學者ならざる良醫の手に託したい。

*　*　*　*　*

獨逸などでは、基礎醫學者は各自其本分を固守して一意專心、其の專攻學科の敎授研究のみに從つてゐるが、吾邦の基礎醫學者中には、臨牀的方面にも手を延ばして、病者の診療をなし之に對する報酬を受けて生活の資に當てゝゐる人々も鮮くない、殊に此の如き人々は病理學者、細菌學者間に多く發見せられる、されば、口やかましい世間では之を非難して基礎學者として世に立てゐながら開業醫の向ふを張て病人の脈を握るが如きは以ての外の所行であると論ずる者もある。

自分は敢て辯護の勞を執るものではないが、實際的醫學と密接の關係ある病理學者

や細菌學者が病人を診療したとて、別に荒立て非難すべき程のことでないと思ふ、固とより前述べた如く『醫學者必ずしも良醫に非ず』であるから、如何に彼等が學理に通じて居るとも、其の實際上の技能と經驗とはあまり信賴するに足らず、隨分手加減の怪やしい人もあるであらうが、併し彼等も醫家の一人であつて醫術開業免狀を有してゐる以上は、病人を診し之に藥を投ずるのに何の不思議があらうぞ、之を咎むるのが却て不思議である。

更に一歩進めて論じてみやう、病理學者とて、唯、屍體解剖、顯微鏡的研究のみに依て完全に疾病の本性を究むることは出來るものでない、時と場合とに依ては更に進んで親しく生ける人間に就て其の症狀を觀察し、臨牀上の方面よりも、研究を試みねばならぬこともある、されば病理學者が、其の準備の爲めに病者の脈を按じ胸を打ち腹を撫するのは決して差支なきのみならず、寧ろ之を行ふ樣奬勵しても可なりである、三浦守治博士が、脚氣の病理に精通せられてゐるのは、病理解剖上の研究よりも寧ろ臨牀的研究に負ふ所が多いのである、若し三浦先生が病者に就て研究を試まれなかつたらば、彼の脚氣衝心の病理や心臟肥大の病理等をあれ程まで精密に解釋することが出來なかつたであらう。

併し病理學者が其本分を忘れて、開業醫の領域内に入り、多大の報酬を要求するが如きに至ては、其の表面上の名目が如何に研究の美名であつても、斷じて贊成することは出來ぬ、若しそれ程開業醫の眞似がしたいのならば、速に學者の看板を撤去し、教室の人たるを辭して自から玄關を張るがよい。

彼等の中には左の如き言譯をなす者がある、曰く學者として終日研究室に籠居してみたいのは山々であるが、俸給生活は到底一家の費用を辨ずるに足らない已むを得ず、他の方面に手を延ばして生活の餘資を仰がねばならぬと成程此言には一理がある、吾邦の政府及び社會の學者に對する待遇は頗る冷淡極まつたもので、現に自分の先輩として畏敬する某々博士の如き、二三十年の久しき亙りて斯學の教鞭を執れる大家でさへ其の年俸は僅かに二千金以内であるから、從何位動何等醫學博士の肩書はいかに尊嚴を極めてゐても、其の日常の生活は實に粗末なるもので、到底其の社會的地位を保つてゆくことは覺束ないのである、されば、自然の勢として、開業醫の眞似がしたくなるのも決して偶然ではなく寧ろ適切に同情の意を表すべき次第である、が併し一歩を退て考へてみると、古から學者は貧乏と相場が極まつてゐるものである、學者になつて金を儲け氣樂に世を送りたいと思ふが如きは根本的に誤つた考へ

である、學者たるものは清貧に安んじ、顏回の如く一簡の食一瓢の飲陋巷に在ても其樂みを改めざる氣慨がなければならぬ孔聖の蔬食を食し水を飲み肱を曲げて之を枕とし、樂み亦た其中にありと觀ずる意氣がなければならぬ、されば、此意氣と氣慨とが無いやうな學者ならば速に學者的生活より去るが善いではないか。何を苦んで、貧乏生活をつゞける要があらう。

思ふてこゝに至れば、自分は、そゞろに山極博士の高風を景仰せざるを得ないのである、博士は毫も生活の不如意を顧みず、一意斯學の研究に從ひ、之を以て唯一の慰樂とせられてゐる、實に博士の生活は孔子の家語にある『居蒿蘆蓬戸之中、衣敝衣冠、併日蔬食街、然有自得之志』の慨があつて、學者の典型と稱しても善い位である、世の學者先生達が其待遇の冷淡にして收入の少なきを口實とし、開業醫の勢力範圍内にまで進入して、金儲に腐心するが如きは眞正の學者たるの氣慨と意氣とが無いためである。

併し、學者は貧乏と相場が極つてゐるとは言ふものゝ今日の如く、別に優待法をも講せずして不如意の生活を送くらしむるは決して、國家の慶事ではない、さればとて、財政困難なる政府、學問に冷淡なる社會が、近き將來に於て優遇の法を講ずるが如きことは甚だ覺束ない次第である、されば、今後學者になるべきものは、清貧に安んずべき

元氣のあるものか、或は優に徒食し得べき財產を有せるものでなければならぬ。

自分共は、基礎醫學者が、病人に接するのを見て必ずしも非難の聲を放つものでない否、基礎醫學者と雖、時と場合とに依つては臨牀上病人の研究を行ふの必要もある故、其の豫備として、病人の脈に接して置くのも、必要なりと思惟するものであるが、併し、自から進んで之に對する報酬を要求し臨牀醫家と殆ど區別のつかぬやうな金儲をなすに至ては斷じて排斥せざるを得ぬのである。

*　*　*　*　*　*

ショペンハウエルの疾病

ショペンハウエル Schopenhauer は人の知るが如く十九世紀の獨逸思想界に一異彩を

放つた哲學者で、厭世論を主張し人生を以て苦痛罪惡の巷と看做した人である「而て他の一方には婦人論を草して女性の缺點を忌憚なく暴露し一大痛棒を喰はせたこともある、渠は七十有餘年の一生を通じて伉儷を迎へず獨身で終つた然るに其の壯年時代に於て俗人と雖顰蹙する黴毒に感染した事實は近時イワン、ブロッホ Iwan Bloch の考證に依て闡明せられ且つ黴毒の感染がショペンハウエルの有名なる厭世思想に影響を及ぼしたことが認めらるゝやうになつたのは多少興味あることゝ信ずる故渠が病史の一班を敍述して、同學者の一粲に供しようと思ふ。

千八百二十四年五月二十一日、ショペンハウエルが獨逸民顯より、友人フリードライヒに宛てゝ送りし手紙には次の如き文句がある。

一年前當地に參りしが、其後六週頃より、引き續て病起り一冬を家にのみにて暮らし甚だしく惱やみ申候、一ヶ月以來恢復致候へども尙ほ神經衰弱になやみ、今し漸く君の御芳狀に對して返書をしたゝむるにも手打ち震るひて甚だ困難を感じ候身體倦怠し、晝間は睡眠を貪ぼり右の耳は全く聾となり候、されば有名なる南墺のガスタイン溫泉に赴き靜養せばやと存じ候、湯治を終り候はゞ再び當地に立ち歸るべく候へども此の地獄の如き恐ろしき風土の地には再び滯在致すまじく「ライ

ンに行きて、其處に夏を過ごし體力の恢復に從ふ所存に有之候云々(意譯)

(原文)

Vor einem Jahre kam ich hierher, und etwas sechs Wochen darauf fing eine Verkettung von Krankheiten an..... ich habe den ganzen Winter in der Stube zugebracht und sehr gelitten. Seit einem Monate bin ich hergestellt, aber noch so nervenschwach, dass ich, vor Zittern der Hände, erst jetzt Ihren Brief und zwar mit vieler Mühe beantworten kann, mich matt dahinschleppe und bei Tage einschlafe; dabei ist das rechte Ohr ganz taub. Allen dieselben Uebeln soll das berühmte Bad Gastein in Süd-Oestereich abhelfen .... nach der Badkur muss ich hierher zurück, werde ich aber diesem Höllenklima dann nicht wieder aufhalten, sondern an den Rhein gehen, dort den Sommer und die Wiederkehr meiner Kräfte zu geniessen.

又た渠が宮中顧問官チールシユ Thiersch に送つた書翰の中には民顯の醫士グロッシーに宜しく挨拶を願ふとの文句がある。

メビウス Möbius は上述の手紙の文に徵して恐くは窒扶斯に罹つたのであらうとの考證を下した(Möbius. Ueber Schopenhauer, 1899.)而て其後、イワンブロッホがショペンハウエルの遺書を精細に調査し、其手控を見た所が鉛筆を以て次の如く記載してある

ものを見出した(Iwan Bloch, Medizinische klinik. 1906.)

赤降汞　十月十四日より

二·五グラン			
四グラン	十月二十二日迄	同	十一月二十五日迄
〇·五グラン		同	十一月二十九日迄
四グラン	十月二十八日迄	同	十二月三日迄
同	十一月一日迄	同	十二月七日迄
同	十一月五日迄	同	十二月十一日迄
同	十一月九日迄	同	十二月十五日迄
同	十一月十三日迄	同	十二月十九日迄
同	十一月十七日迄	同	十二月二十二日迄
同	十一月二十一日迄	同	十二月二十三日迄
		六七半グラン	
		昇汞一六グラン	

其次には「インキ」にて左の如く記してあつた。

余は二三回塗擦をなせり、初めの四日は毎日、次で一日休み、それより隔日、殆んど三十日間云々

終りに鉛筆にて書簡袋に『癒瘡木丁幾』と記載してあつた。

上記の事實に徴すれば、渠が殆ど七十餘日に亙りて驅黴療法を行つたことは明であり、從て黴毒に罹つて居つたことがわかる、而て、ブロッホの說では最初は水銀軟膏の塗擦を行つたが效果が見えなかつた爲め、赤降汞を內用したのであらうと言つてゐる、赤降汞は當時頑固陳舊なる黴毒に用ひられたもので、十六世紀時代の頃より使用せられたが、千八百〇八年に至てベルグ Berg が再び之を賞揚し、毎日一「グラン」(〇·〇六瓦)を內服せしめ十乃至十二週にして效を奏することを認めた、而して此藥劑を特に慢性頑固の黴毒に用ひて卓效があつたと云ふことは當時有名の醫家フフエランド、ホルン、ルスト、リッテル Hufeland, Horn, Rusat, Ritter 等の認めた所である、又た、ハッセ Hasse も同樣に多數の陳舊頑固の黴毒患者に用ひて著るしき效果を收め、且つ之と共に癒瘡木を用ひて其效力を强めたといふことである是に由て之を觀れば、ショベンハウエルが赤降汞を內用したのは頑固陳舊なる黴毒の爲めであつたことが分かる、此他に尙ほ昇汞を用ひて其量十六「グラン」(〇·九六瓦)に達し、又た最後には癒瘡木を用ひたのである。右の他、渠が遺して置いた手控の中には醫士の往診を受けたことが百二十回、醫家の門を敲いたことが七回あつたことを記載してある而してチールシュに送つた書

翰の中に記してあるグロッシーといへる醫士はエルンスト、フホン、グロッシー Ernst von Grossie (千七百八十二年乃至千八百二十九年)のことで、此人はザルツブルグの內科教授で、千八百〇八年以來民顯に住み有名なる臨牀醫家であつた。

ショペンハウエルの病は隨分永かつた、卽ち渠が千八百二十三年五月下旬以太利より民顯に歸り六週の後卽ち七月の中旬になつて『病の連鎖』Verkettung von Krankheiten が始まつた、之が爲め冬を家にて送り、千八百二十四年の二月に至て恢復した、さて『病の連鎖』との文字あるを見れば、渠は黴毒の他、尙ほ他の急性疾患に罹つたことが明である、如何なる病であつたか確かにわからぬが、メビウスは窒扶斯であらうと言つてゐる、而して此病のために右耳は聾となつたのである、渠が千八百五十六年五月一日フラウエンステート Frauenstädt に宛てた書翰に今を去ること三十三年前(千八百二十三年)病のために右耳は全く聽力を失ひ左耳は健全の狀態に留まつたが、四年以來より左耳の聽力も漸次減退せしことを記してある、而して、千八百二十三年渠の右耳が聾となつたのは果たして黴毒に基因したものであるか否かは明白でない。

渠が黴毒に罹つてゐたことは確實で而かも上記の如く赤降汞を內用したのを見れば餘程以前より黴毒を患いて居たのがわかる、此藥劑は當時專ら慢性陳舊の黴毒に

用ひられたものである故、從て渠の病が慢性頑固の黴毒なりしことは明である、而して水銀療法を施した上、更に南墺「ガスタイン」に赴きて湯治をなした結果、黴毒を根本的に治することを得、爾來身體健全であつたが遂に、七十三歲にして肺炎に罹つて世を去つた。

渠が黴毒に感染して其苦惱を經驗したことは、渠の厭世哲學に影響を及ぼしたことであらうと想はれる、フホルケルト Volkelt の說く所に依れば、渠の厭世觀は、其の經驗上より割り出されたもので、其青年時代に於ける苦痛と戰鬪との響きであると言つてゐる、メチユニコッフ Metschnikoff は十九世紀に於ける三厭世家たるバイロン、レオパルヂー及びショペンハウエルの人世觀は其の病に基づいたものであることを論じた、果たして事實であるか否か確かに知ることは出來ぬが、黴毒に感染したことが少くとも渠の厭世觀の動機の一となつたことは、推測し得られる。

渠が青春時代殊に千八百〇五年より六年頃の時代は肉慾が旺盛であつた、當時渠の作つた『快樂、地獄』O Wohllust, O Hölle の詩は、渠が戀愛の憧憬者であつたことを示してゐる此點に就てはメビウス、グリーゼバッハが多數の證據を擧げたことがある、フラウエンステートは述べて曰くショペンハウエルは、性慾の點に於ては、決して純潔

の人ではなかつた、渠が余に白狀した所では、渠は女色を好み、伊太利にあつた時は風土の美のみでなく、女性の美をも愛翫したとのことである。渠の有名なる著『愛の哲學』Metaphysik der Geschlechtsliebe は實に渠の經驗を基としたものであらう、否らずんば、彼樣な論文を草することが如何にして出來ようと。

渠が自から告白した所に依れば、厭世觀を構成したのは、千八百十三年より千八百十八年の間であつた、素とより渠の性格にも因つたものであらうが亦た渠に深き惱やみを與へた特別の原因が其の一要素となつたのであろう、渠が民顯に在つた時手書したものゝ中に次の如き文句がある曰く嗚呼快樂の一年は微風の如くに消え去りぬ、されど不幸の瞬間は苦惱の百年をもたらすと Ach, ein Jahr des Genusses vergeht wie ein leichter Lufthauch, aber ein Augenblick des Unglücks bringt ein Jahrhundert von Leiden 噫渠が不幸の瞬間永年のなやみと言つたのは黴毒に感染したことを指したのでは無からうか、而して渠が黴毒に感染したのはイワンブロッホに依れば、千八百十三年伯林にあつた頃である。

渠は『愛は吾人の敵なり』Die Liebe ist unser Feind と云つた、實際上、渠は之を親しく自身に經驗したのであつた、併し此の痛ましき經驗は渠の著『愛の哲學』と『意志及び觀念

としての世界』とに於て美妙の文字となつて描き出されてゐるのである。

* * * * * * *

現代女性の病的現象

(一)

近代に於ける女性の傾向を觀ると、從來愛を生命とし優雅を理想とした女子特有の思想は漸次地に墜ちて、個人的獨立自我の滿足を要求する女性が段々現はれるやうになつてきた、此等の現象は畢竟多年男子の下に忍從的生活を餘儀なくせられた反動と、他の一面に於ては女子教育の進歩し社會的經濟の發達して女性にも適當なる職業の諸方面に出來て從來の如く男子の保護を受くるの要を感ぜぬやうになつた

結果とが相俟て、女性の自覺を喚び起したのである、されば、今日幾多のノラ、マグダの踵出するのは、つまり近代文明の發達に基づく自然の趨勢であつて、誠に已むを得ざる現象である、併し吾人は男女の間には其の體質に於ても又た腦力に於ても、自然に定まつた性的差異の存することを銘記せねばならぬ、若し此性的差異を無視して、女子も同じく人間であるとの單純なる思想より、男子の領分内にまでも侵入し、之と同等の名譽權利を強要する者のありとすれば、それは女性存在の意義を顧みず、男女分業の天則を蔑視せる病的の女性と稱せねばならぬ、又た此の如くに至らずとも、常に男子に對して反抗の態度を取り、金切聲を擧げて罵倒嘲笑を縱にし、結婚の無意義を主張して飽く迄自我を押し通さうとする女性のあつたとすれば、これも亦た病性女性の範圍内に算入すべき厄介物である、而かも此の如き女性が啻に歐米のみならず、吾邦にも隨分あらはれるやうになつたのは實に慨嘆すべきことである、女性の自覺其者は固とより近代文明の産した自然の成り行きで女子の社會的位置を向上せしむる動機となることであるから、決して異存のあるべき筈はないが、然るに其度を通り越して、絶對的の自由解放を要求し男性的文明の仲間入をして政治科學等の方面にも參加せんと企つるが如き運動を敢てするに至ては、女性其者の本分を忘れ、兩性

の區別を沒却せんとする病的現象であると謂はねばならぬ。

(二)

抑も自然が人間に男女を別つたのは、其結合に由て子孫を繁殖し種屬繼續の目的を達せんが爲めである、而て受精妊娠育兒の如き重要なる生殖任務は全く女子の負擔する所であるから、生物學上の立場より觀れば、女性存在の價値は生殖にありと斷定せねばならぬ、而て自然も、女性をして重要なる生殖上の任務を遂げしむべく其身體に特別なる構造を賦與したのである、看よ、女子の身體が脂肪に富み、肌膚豐腴圓滿で所謂曲線美を發揮してゐるのは、其分娩せる生兒の哺育に須要なる乳汁の原料を貯藏するが爲めである、而て此脂肪の豐富なるが爲めに、筋肉の發育男子に於けるが如くに著るしからず、纖弱にして體力に乏しいのは當前のことで又た一方には生殖機能に身體の有機成分を費消せねばならぬ爲め、自然に身體の發育抑制せられ、全身の諸器官が、小兒型に留まれることも一見爭ふべからざるところである、蓋し碩學スペンサーの論じた如く生殖機能と身體の發育とは互ひに反比例をなすもので、卽ち生殖機能の負擔重き女性にては、妊娠分娩をなし更に其生兒に授乳する爲め身體の成分を之に費消すること多く、之に加ふるに定期性に月經ありて毎月一定量の血液を

失ふ等此等の原因相倚て身心の發育を制限するに至つたのである、女子の智力に乏しくて感情に支配せられ易く、目前の小利害は直觀し得るも思ひを將來に馳せて種種に考察を運ぐらし大事を決斷する能力に至ては男子に數十歩を讓らざるを得ぬ、此等の點より見るも女性本來の性質が生殖者であつて妻たり母たるべきものたることが明白である。

然るに世間の論者の中には、次の如き說をなすものがある、曰く女子の精神作用が男子と異つてゐるのは、決して先天性に非ずして敎育の結果に他ならぬのである、それ故、男子同一の敎育を施したならば必ずやその精神作用も男子に匹敵するに至るのであらうと、斯樣な說は一部の敎育家や、女權論者の口にする所であるが、余輩より之を觀れば非常の謬見である、蓋し敎育の效果なるものは之を個人々々に就てのみ收むべきもので生來、其性を異にする男女其者に同一の敎育を施して同一の效果を收めんとするが如きは、自然の性的差異を無視せるものである、男女が既に小兒時代より其の性行を異にしてゐることは實際上掩ふべからざる事實で、少女の好んで人形を弄ぶが如き、決して敎育の結果でなく、將來、母たり小兒の保育者たるべき生來の性質を發露せるものであるグロッスの述べた如く小兒の遊戯は決して大人の動作を

模擬するに非ずして全く自然の性に出で、將來に於て其の爲すべき動作を表現するものである、固とより個人々々に就ては敎育の力に依て精神の性的差異を幾分か減少せしめることは出來るか、自然に定つた先天性の精神的素質の差異に至ては遺傳の關係上決して除去せらるべきものではない男子が智力に長じてゐるのは、コックスの論じた如く、男子の特徵で、自然淘汰の結果として發達したものであるが之に反して女子固有の特性は愛である、熱烈なる愛を生命として己の愛する者の爲に殉ずるは、實に女子本來の性質で、ゲーテ、シルレル、ワグチル、巢林子等の戯曲作品にあらはれたる女性は更に作家に由て美化せられ理想化せられてゐるが、渾身愛の精神に充實し、人生の枯野に咲ける薔薇の花とも見るべきものである、蓋し愛が殆ど女性生活の大部分を占めてゐるのは、之を科學上より觀れば、自然の命じたる生殖の任務をつくさんが爲めである、此の如く女性存在の意義が生殖の點にある以上は、其身體及び精神的生活が生殖機能の影響を受けて之に左右せらるゝのは自然の理法であつて、月經期及び其前後に當り女子の生活現象に較著なる變動のあらはるゝが如きは實に其確證である、卽ち月經の起る前には、全身筋肉の力、呼吸作用、體溫等は殆ど其頂點に達し、月經の初まる頃より下降し、月經間には最も低く、それより再び漸次舊に復し、

次回の月經前に至れば復た其頂點に達するのである、加之月經時には精神生活も亦た影響をうけ、一時的に意識障碍起りて抑鬱或は躁狂の狀態となることがある、而し其結果往々、放火、殺人、竊盜の如き犯罪を始めとし、自殺、讒謗、猥褻等の行爲の月經期に演ぜらるゝことは刑事人類學者及び醫學者の既に確認せる所である。

往古の大醫學者ソラヌスは月經、妊娠、產褥を以て女性の免るべからざる疾病と論じたことがある、蓋し此等の生殖現象は固とより生理的のものであるが、之に基因する全身生活の變動が屢、生理的境界を超ゑて病的症狀を呈するに至ることは實際上の事實である、ことに妊娠及び產褥期に於て、精神異常の發起することは決して鮮くない。

それから女性身心の薄弱なる結果として、比較的過勞の作業よりも神經及び精神の病的變化を發起することがある、エンゲルマンの證明した所では、高等の教育を受けて過度に腦力を使用する女子には、月經痛に惱やむものが多い、又たメビウスも『學校が愈善くなるに從て產褥は愈惡くなる』と言つたことがある、其他女子の慢性病に罹り易く、其經過の男子よりも長きこと、腺病、偏頭痛、僂麻質斯、萎黃病、「ヒステリー」癲癇震戰麻痺に罹ることも男子よりも多いことは實際上疑なき事實である、又たヂユラッ

クが墺國維也納に於て、不健康、勞働、物質的困苦の爲めに死亡した貧民の數を調べた所が、女子の死亡數が遙るかに男子に於けるよりも多かつたといふことである、此の如き事實は女子の身體の纖弱で抵抗力に乏しきことを證示せるものであるが、又たメンデの說に依るも女子が勞働的職業に從事してより「ヒステリー」、癲癇、貧血病に罹るものが絕ゑず增加するといふことである。

以上說き來る所に依ても、女性が、其體質に於て男子と對抗すべからざることは明かである現に女子に適當せる職業に從事してゐるものに在ても、其體質の生來纖弱なる結果として、疾病に罹る傾向が多い、モルの說に依るに、小學校の女教師は男子よりも病に犯さるゝこと多く且つ其の病氣の經過も永いといふことである、又た工業法案に於て特に女性の勞働者に對して其作業時間を男子に於けるよりも短く制限してあるのも、つまる所其の身體の弱いが爲め、健康を保護せんとする目的に出てたのである。

(三)

更に一歩を進めて女性の智的方面を觀察してみやう、コックスは其著『男女同等』に於て女子の精神的能力の男子に比して著るしく低劣なることを論じ、女子は男子より

も熱心敏捷に作業するが、其の事業に於て、偉大なる思想、天才的能力、及び判斷を缺いてゐることを痛言した、之を古今の史乘に徵するも、女性より未だ曾て大人物を出したことは殆んど無いと云つてよい、先づ美術家に就て觀るに、古來有名の巨匠は殆ど男子で、女子に於ては僅かに其二三を求め得るのみである、而かもローザ、ボノーの如きは眞の女性と看做すべきものでなく、彼女の容貌は、男性的輪廓を具へ、且つ常に男裝をして居つた、有名なる女性文豪に於ても亦た同樣なものが尠くない、十六世紀に出でたる、ルイ、ラーベの如きも、モルの說に依れば著るしく男性的色彩を帶びジョージ、サンドも平素男裝をなし、得々としてゐた、又た今日まで世に喧炙せらるゝ音樂の作曲を殘せし人々の中には殆ど女性を發見することは出來ぬ、ルビンスタイン曰く女子にして卓絕せる作曲子守唄を作りしものは未だ嘗てこれ在らずと、それから料理法、助產等の如き女子の職掌に屬する技能でさへ、之を發達せしめたものが却て男子であつたことは、ハイマンの確證した所である、又たエリスの說に依るに、今日まで專賣特許權を得たる發明をなした者五萬四千人中、女子は僅に七人を算するに過ぎぬ、メビウスも音樂及び助產は古今共に女子の職業とする所であるが未だ嘗て助產の技を進步せしめた女性のありしことを聞かずと云ひ、女子は元來思考力に乏しく

持續して研究の業に從ひ、能く困難に打ち勝て事業を完成すること能はざるものであると論じた。

斯く說き來れば或は次の如き反論者が出づるかも知れぬ、曰く、古今の史上に徵するに治世の效績著明なる女皇例之は、エリサベス、ビクトリアの如き女皇があるではないか女子の才能が低いとか、家庭以外の作業に不適當なりとの說は當さに抹殺すべきものである、併し此の如き論は唯楯の一面のみを觀て、他の半面を閑却したるものである、元來治績を擧げたる女皇は、皆怜悧な方々で、自己の能力の限界を知り、才能を要する政務の如きは擧げて之を臣下に委託せられた故、治績の擧つた譯である、これは決して自分等の一私言でなく女性の觀察に長せるモルも言つた所である、巾幗の一婦人にして堂々たる大會社等を經營し、著々功果を納めてゐる者も少くないが、それは部下及び顧問を怜悧に選擇して之に殆ど全權を委託するのが多いのである、併し他の一面を觀れば、所謂「女さがしくして牛を賣り損ねる」との俚諺のある通り、なまじいに自分を買ひ被つて事業に手を出し失敗を招いた者も決して少くない、又た古今の歷史を觀ても、女性が政治の方面に關係して世を亂し國を傾むけた實例は隨分ある、呂后、則天武后、西大后を始めとし、平政子、美福門院、淀君等は固とより女傑と稱

して然るべきものであるが、矢張り女性は女性で、其行ふたことにを隨分まづい者が多く、爲めに政治上に於ても、又た個人上に於ても失敗の歷史を後世に留めたではないか、女性は元來直觀的感情的で目前の利害を觀るに鋭敏であるが、思ひを遠くに馳せて大事を決斷するが如き能力や時運の機微を洞察して之に應ずる新計畫を行ふが如き能力に至ては殆んど缺如してゐるものであるそれ故、怜悧なる女性はよく自己の能ふ所の範圍のみを守りて之より外に出づることはない故、失敗することも稀であるのである。

今日まで女性に偉大なる人物の現はれなかつたのは、舊來の習慣上、家庭内に寂寞たる生活を送り社會と交渉することの殆どなかつた結果である故、若し女子を解放して之に自由を與ふると共に高等の教育を施したならば、男子に匹敵すべき者の踵出することの疑ひなしと論ずる人もある、成程此說には一理があるようであるが、併し前既に述べた如く男女の間には先天性に定まつた性的差異があるから、之を無視して男女を同一の模型中に陶冶せんとするが如きは、根本的に誤つた考へである、男女は其の本領に於て全然異つたものである以上は兩者各々其特徵を發揮して相互ひに補助するやうに取り計ふこそ自然の理に協へるもので、兩性の差異を沒却してまでも

男子同等の教育を授けて女性の位置を向上せしむるの要はない、斯く言へば或は次の如き說を唱ふるものがあるかも知れぬ曰く、然らば女子にして其の本領たる生殖機能を中絕したらんには、妊娠、分娩、產褥等の自然的負擔を免れるから、男子同等の位置を占むるに至ることが出來るであろうと併し、斯樣な考へは全く遺傳を眼中に置かぬ盲說である、男女の性的差異、及び其官能の分業は原始以來よりの遺傳であるから、今更如何ともする譯にゆかぬ、假令ひ今日の新教育を受けたる女性が其一生涯を通じて獨身生活をなし、生殖を廢した所が、女は矢張り女で、累代の遺傳たる女性固有の特徵は決して變化すべきものではない又た元來生殖者たるべきものが男子同等の位置を占めんが爲め、愛を犧牲として獨身生活を主張し子を生むことを念頭に懸けざるが如き女性はコックスの言つた如く變性的女性で精神的不具者と看做すべきものである。

(四)

抑も今日歐米各國に行はるゝ婦人運動は、其實、近世より始まつたものでなく既に太古に於ても、其形跡のあつたことは、ルードウイッヒ、プリードレンデルの著書『羅馬風俗史』に記述せる所であつて、卽ち羅馬古代の婦人が進んで政治、文學數學等を攻究し、

之が爲め當時の碩學ゼヲカをして女子たるものは學問の蘊奥を究めんよりも寧ろ家に在て紡織に從ふを善しとすと勸告せるに至らしめたことがある、又た希臘雅典にても曾て女子が男子の壓抑より免れんとして社會的運動を開始し、アリストフハーヲスの嘲笑を買つたといふことである、而して近世の婦人運動は、其端を佛國革命に發し、天賦人權思想の歐洲の天地に爆發してより女子も亦た男子同等の權利を有すとなし、所謂男女同權論の世に提唱せらるゝに至つたが、近代に至ては單に理論の上にのみ留めずして、進んで實際上にも此の權利思想を顯現せしめんとするの傾向が生じてきた、それは主として經濟制度の發達して、女子にも適當なる職業の諸方面に發見せられ物質的に獨立することが出來るようになつた爲めである、歐洲に於ても、西班牙、葡萄牙の如きは尙ほ傳來の舊道德の勢力のあるのと、工業の進步せざると、敎育の普及せざるとに由り、婦人運動の行はるゝことも殆ど無き有樣であるが、之に反して從來女性の位置劣等なりし邦國例之ば埃及の如きは今や女子敎育の進步した結果として、高等敎育を受けたる女性の自由解放を主張して著々成功し、又た土耳古にても近時青年革命黨の勝利以來、從來女子に加へられたる壓迫の度は漸く輕くなつて、女子の外出に際し覆面を强ゆるが如き舊慣は既往の如くに嚴ならざるように

なつた、而て印度に於ける婦人運動に至ては、今や著るしき進步を告げ、女子にして種種の雜誌を發刊し、萬丈の氣焰を吐くものも少くない、此等の女子が文筆に長じ、其意見を簡潔に敍述する技倆も亦た侮るべからざるものありといふことである。

以上說くが如く、歐洲のみならず、東亞に於ても、女性の自由獨立を唱へ、個人の權利を要求し、進んで男子對等の位置勢力を占めんとする運動の逐次發展するようになつたのは、一面に於ては女子の進化と稱すべく、時勢の趨勢が此の如く女子の自覺を喚起したのであるが、併し他の一面に於ては新敎育を受けたる女性が、經濟的獨立の素地を得た結果、自分をあまりに高く買ひ被つて男女間に於ける性的差異を無視し、男性的文明の仲間入りをして、政治、科學、文學等あらゆる方面に參加せんとするが如きは慥かに誇大妄想と謂はねばならぬ、加之、急速に其目的を達せんが爲めに常軌を脫せる過激の運動を試みつゝある英國の參政權運動の如きは、殆ど狂的發作と看做しても可なるものがある、彼等女性が團體を組みて議院を襲ひ、首相を途上に强要し、捕縛せられて獄に投ぜらるれば饑餓同盟の手段に出でゝ警官に反抗し、放縱至らざるなく、社會の秩序公安を害して得々の色あるが如き毫も女性らしき所なきのみならず、却て狂暴なる社會黨の男子をも凌駕するの概がある、余輩は此の如き女性の精神

狀態を疑はざるを得ない。

近代の女性が男性化しつゝあるのは實際上掩ふべからざる事實で、此點に就ては英國のエリスや、獨逸のモルなども夙に之を論じてゐるが、蓋し近代文明の賜として女性の經濟的獨立を得たるの結果、其精神上の自立獨行を促し、不知不識の裡に男性化するに至つたのであらう、イブセンのノラが金を儲けた時は心中愉快になつて恰かも男子になつたような氣持がすると、リンデン夫人に語るのを觀ても這般の消息の一班を解することが出來る。併し經濟的獨立を得たる女性が之を以て滿足し進んで男子と對抗せんとはせず、退いて其位置を守るに留まつてゐるならば、假令ひ其思想が男性的色彩を帶びても之に對して妄りに非難の聲を放べきことでない、然るに彼等が、其守るべき限界を超え性的差異を無視して、男子と共にあらゆる社會的方面に活動せんとするが如きは、病的女性と看做さねばならぬ、吾邦に於ても此惡思潮の餘波を受け、又た近代文藝の女性觀に刺戟せられて、傳來の道德思想を排斥し個人の權威自我の滿足を主張する小ノラ小マグダが漸次踵出するようになつてきた、而て此等の新らしい女の中には、男子さへ公然行くを憚る妓樓に登り或は銘酒店で强烈なる洋酒を飲み煽て遊樂を恣にしたものがあつたとのことであるが而かも、其女等が

新らしき女性の代表者で高等教育を受けた者であると聞くに至つては實に一驚を喫せざるを得ないのである又た近時婦人雜誌にあらはるゝ女性の論稿の中には飛び離れたものが多く、殊に其の最も甚だしきは堂々と本名を揭げ、男性を罵倒嘲笑して意氣得々たることである。

男は凡て私の敵です、否女性の敵です……男も馬の糞も同じ物です……惚れて見やがれ只置くものかとの俗謠は眞に私の心を得たものです(新婦人第二年第六卷所載)

實にあきれるの他はない、其全文を讀むに敢て奇矯を衒ひたりとも見えず、實際その本心から出たものゝ如くに思はれる。

以上說くが如く熱狂過激なる婦人運動に從ひ或は公然靑樓に登り又は居酒屋に入りて强烈なる酒に醉ひ或は不穩當極まる文字をつらねて男性を罵倒して自から快とするが如きは慥かに其の病的女性たることを證するものである。

英國の學者エリスは其著『性的感覺』に於て、近頃世に行はるゝ婦人運動の害少からざることを述べ女子の精神障碍、酒精中毒及び犯罪の數を增加し、又た同性の愛の如き性慾倒錯を增加せしむる原因となることを說いたが、其の實例は旣に英國の參政權

運動者に於けるのみならず、今や吾邦の女性社會にもあらはれる樣になつた、蓋し女性の先天性に一定せる男女の性的差異を無視して男性的文明に參加せんと熱中するの結果は不知不識の裡に女性的觀念の薄くなつて、男性的思想に傾むき、從て其の擧動態度も男性の色彩を帶びてくるのは蓋し自然の數である、參政權運動に從へる英國の女性の行動が毫も女性らしき所なく、其の過激猛烈なること男子に讓らざるが如き、或は吾國の『新らしき』女性が妓樓に登りて宴樂を恣にするが如き或はすべての男性を馬糞同樣と罵倒して得々たるが如きいづれも極端に男性化せる女性の好標本である、而て其の男性化の結果として、性慾の方面にも異常を來たすに至ることは蓋し理の看易き所で、男子に對する愛情の薄らぐ結果、自然に同性の愛に陷る傾向を生ずるやうになる、リユーリング及びイワン、ブロッホ等は婦人運動は、同性の愛を事とする女性に依て行はるゝ傾向のあることを說いたが、それは果たして最初より性慾の倒錯ある女性が婦人運動に從ふのであるか或は婦人運動其者が、益々男子に對する愛情的傾向を殺滅して性慾の倒錯を來たすのであるか、兩者の間に判然たる區別を劃することは出來ないけれども、要するに性慾の倒錯と近代的女性の思想行動との間には慥かに一聯の連鎖があるやうに思はれる。

ひとり言

* * * * * *

頃日偶〻農學博士玉利喜造氏の著『內觀的研究、邪氣新病理說』を一讀するの機會を得たり、邪氣といひ靈氣といふ、これ實に空漠たる抽象的名辭にして而かも架空の想像的產物に過ぎず、此の如きものを捉へ來りて以て疾病の本性を闡明し、科學の基礎の上に立てる近世醫學の病理說に對抗せんとするは恰かも希臘太古の醫學者の「プノイマ」Pneuma 又たはパラチエルヅス、ヘルモンの「アルケウス」Archaeus 等を以て生活及び疾病の原理となせる古代の空想を再興し近世醫學を律せんとするの迂愚と何ぞ選ばん、洵に笑ふべきなり、玉利博士は農學に通曉せる人なるべきも、未だ嘗て病人を診

したることなく、又た病體を解剖したることもなかるべし、醫學に門外漢たるの人にして、一種の新病理說を首唱して現代醫學に抗せんとす何ぞ、僭越無謀なる、而て自から稱して新病理說と云ふも其實は科學上何等の根據もなき邪氣靈氣を云々する徽の生へたる陳套の愚說のみ、此の如きは、十六七世紀時代には通用したらんも二十世紀の現代に於て之を唱へんとするに至ては、其の迂濶の甚だしきに驚かざるを得ざるなり、殊に一時東都に於て流行したる紅療法の效能を麗々しく揭げて、其の實自己暗示 Autosuggestion に基づく效果たるを悟らざるが如きに至ては到底醫學に容喙すべき資格ある人に非ず、博士は科學者にあらずや、何ぞ、精緻なる觀察研究を試みて新說を建設せざる、妄りに邪氣靈氣を云々して新病理となすが如きは、科學者の品位威嚴を失墜すること實に大なり、三笑九嘆せざるを得んや、噫醫學の駿速なる進步を遂げつゝある二十世紀の今日に當て玉利といへる一農學博士より邪氣新病理を拜聽せんとは、何人も思ひがけざることなるべし、人は長生したきものなる哉。

近年醫科大學を始めとし、專門醫學校の學生々徒の語學の力の不十分なるは殆ど掩ふべからざる事實なり、彼等の中には病牀日誌の如きものさへ滿足に獨逸文を以て

書き得ざるもの多し、況んや論文をや、余輩の經驗する所を以てすれば、「シュライベン」Schreiben の出來ざるものは「レーゼン」Lesen の力も亦た不十分たるを免れず、語學の力を養成せしむるは蓋し、醫育上最も須要なる條件の一なり、而て之を行ふの捷徑は、講義筆記を廢して專ら原書に據らしめ、又た筆答試驗には必ず、獨逸文を以て記せしむるにあり、今日醫科大學や二三の醫學專門學校にては邦語に獨逸語とを混合して講義すること流行すれども此の如き方法に由て語學の智識を涵養せしめんとするは所謂木に緣て魚を求むるの類のみ。

シルレル、ゲーテを讀むに非ずんば獨逸語學の堂奧に達すること能はずとなし、醫學生に獨逸語を授くるにも、勉めて文學書を以てするものあり、然ども余輩は之に對して容易に贊成の意を表すること能はず、醫學を修むる者に獨逸語の必要なるは固とより云ふまでもなきことながら、ゲーテ、シルレル等の如き美文學をまなぶが如きに至ては獨逸文學專門家のなすべき所にして、醫學の如き實際上の學問を修むるものには、あながち此等難解の文學書を讀まずとも、他に適宜の方法に依て、獨逸語學の智識を十分に注入するを得べきなり、吾人は源氏物語や、西鶴の小說を讀み得ずとも、能

く邦文を解し、能く邦文を草し得るにあらずや、醫學生が獨逸語學を修むるは、之を實際上に應用して、彼國の原書雜誌を讀破し以て最新の醫學上の新智識を吸收するを以て目的とする以上は、彼等に語學を授くるに當ては此點に注意し、普通一般の獨逸語の智識を得たる後は成るべく實際上に活用せらるべき科學書に就て敎授するの方針を執るを必要とす、ゲーテ、シルレルを學ばずとも、這般の方法に從て獨逸語學を修むる所あらば、吾人が源氏物語や西鶴の小說の力なくとも、十分に邦文を理解記草し得ると同樣、決して不便を感ずる所なかるべし、況んや醫學者の獨逸語をまなぶの目的は唯之に依て醫學に關する智識の寶庫を開くべき鍵を得んと欲するにあるをや、されば、醫學生に語學を敎ゆるに當ては、實際上の應用に乏しき文學書を以てし、徒らに其の難解の文字成句に頭腦を惱やまさしめんよりも寧ろ、實際の應用に便にして且つ語學養成の捷徑たるべき科學書を以てするの優れるに若かざるなり。

醫育統一の急務なること素とより論を待たず、然ども各地方の醫學專門學校の設備に改良を加へ其の名稱を大學に改めたりとて、今日の如き醫育の有樣にては果たして醫育統一の實を擧げ得べきか、吾人惑ふ所なくんばあらず、各地の醫學專門學校卒

業生の學力手腕を比較するに、其間に著るしき懸隔差等あることは、殆ど爭ふべからざる所殊に、今日の醫學專門學校中醫育設備の點に於て最も完全なりと評せらるゝ大阪高等醫學校の卒業生と雖其の學力手腕に至ては之を他の醫學專門校の卒業生に比して、必ずしも優越と稱すべからざるものあり、されば醫育の統一を期し、醫士の學力を平均せしめんとするには更らに進んで大學は勿論醫學專門學校の卒業生に對して一樣に同等の國家試驗を科し、之に及第したるものに、醫士の免狀を授與するの方針を執らざるべからず、今日の如く各學校に於て思ひ〳〵の卒業試驗を施し、たとへ、學力の劣等なるものと雖、敎授の手心次第にて慈惠的に及第せしむるが如き有樣にては、よしや、近き將來に於て、醫學專門學校の名稱が醫科大學に改りたりとて何の效果がこれあらむ、吾人の觀る所を忌憚なく言はしむれば、今日の各醫學校は恰かも條蟲の各片節が個々思ひ〳〵に蠢動すると同じく、其敎授の方法に於て、又た卒業試驗の行ひ方に於て各自其の趣を異にするを以て從て其卒業生の學力の平均せざるも亦た怪しむに足らざるなり、之を矯正して醫育統一の實を全ふするの道は唯それ國家試驗を行ふにあるのみ。

傳へ聞く、某醫學校の如きは、卒業試驗には、一人も落第せしめざる方針を執り、現に、健

康人の脈數を知らず又た膝蓋腱反射の檢査法を知らざりし者をも及第せしめたりしと、此の如き寛大極まれる卒業試驗を經て醫士となる者は、幸か不幸か、吾人言ふ所を知らざるなり、而かも此の如き學力劣等の卒業生が、何々學校醫學士の稱號を冠して開業試驗受驗醫の上に立つが如きに至ては所謂沐猴にして冠するもの、實に失笑に堪へずと云ふべし。

死刑廢止論を唱ふる者は曰く刑の目的は遷善悔過にあり、死刑は此目的に背馳するを以て之を廢せざるべからずと、然ども、これ楯の一面のみを觀たる迂說なり、世にはロンブロゾーの論せしが如き先天性犯罪人 Angeborner Verbrechner と稱すべき輩少からず、此の如き者は生來道德的感覺なきを以て、たとへ之に刑罰を課し牢獄に囚へて苦役を强ひたればとて遷善悔過の目的を達すべからず、殺人犯人又た常習犯人のうちには此の如きもの鮮からずされば、這般の罪人は寧ろ之を死に處する方、其當を得たりと謂ふべし又た人道を云々する論者は、死刑を以て人道に背反するの甚だしきものとなし之が廢止を唱ふれども先天性犯罪人常習犯罪人の如き、社會の有害なる寄生物は斷じて之を除去せざるべからず、徒らに人權人道を云々して死刑を廢せん

とするが如きは蛔蟲條蟲を身體より驅除するを以て殺生の罪惡と看做すの愚に異らんや、余輩は更に死刑の範圍を擴張し再三重刑に處せらるゝも尙ほ悔過遷善の實を擧ぐること能はざる罪人の徒は人種の惡化を豫防し又た社會の公安を期するが爲め斷然死刑に處するを妥當なりと思惟するものなり。

* * * * * *

浮田博士の『公娼私娼の利害に就て』を讀む

近時獨逸の醫學者間に廢娼論を主張する者少なからず、ブラシュコ及びイワン、ブロッホ等は其中最も勢力ある論者なり、されば吾邦の廢娼論者にして此の如き學者の說を聞きたらんには、百萬の味方を得たるが如き心地して、益々其持說を主唱するなら

んと心潛かに想ひしに、果たせる哉、浮田博士は去る三月發行の『太陽』に於て『公娼私唱の利害に就て』と題し、公唱制度の廢止すべきことを述べたる論文を掲げたるが、其中に左の如き一節あり。

シユモルデル氏の說によれば獨逸が佛國より採用した檢徵法は警察官によつて專制的に實施され全く不法なる制度となつて居る、此の檢徵法は最初より其心を有たなかつた多數の女子を永久娼婦たらしむるの弊害を生ずると云つて居るブラシユコ氏の說に檢徵の效力は娼婦の一小部分だけに止まり先づ老娼婦だけに適用さるゝ樣なもので徵毒に感染する危險の最も多き初手の娼婦や半娼婦等は全く檢徵を受けて居らぬと云つて居る、佛國の專門家フイアウ氏の說によれば一八八八年より一九〇一年に至る十三年に於て伯林市中の公娼四千人中檢徵を受けたるものは僅かに五割に過ぎぬと云ふ事である、そこで衞生上より公娼は私娼よりも危險である、公娼は檢徵の苦しさを免れんが爲め百分病氣を隱蔽し一時でも全く醫療を避くることを勉むる故病毒は益々激烈となる、之に反して私娼は直に醫師に就て療治をなす傾向があるから其病毒は公娼ほど甚しくない、公娼中徵毒患者の少なきは當にならぬ、猶又た檢徵といふ其事が甚だ不完全である、(香涯生

曰く、シユモルデルと云へる學者なし、シユメルデルなる可し、博士は獨逸語の發音を知らぬと見ゆ)

浮田博士上記の說は、イワン、ブロッホが其著書『生殖生活』Geschlechtsleben に於て論述したる所と殆ど符節を合したるが如し、蓋しブロッホの說たる實際に近く決して之を非定するを得ず、されば浮田博士の所說に至ても固より異議を插む能はざるなり、然るに余が特に博士に對して一言を禁ずること能はざる所以のものは何ぞや、曰く博士はブラシユコ及びブロッホ等の所謂風俗警察の管理の下に立てる賣笑婦を以て吾邦の公娼と同視し、又た渠等の廢娼論と吾邦に於ける廢娼論との間に些も區別を置かざるを以てなり。

歐洲各國に於ける賣笑婦の管理監督の方法に就ては玆に之を詳述するの知識を有せずと雖、余の知れる獨逸國に在ては我國に於けるが如き集娼制たる遊廓の特設なく、唯風俗警察の監督を受けて自宅に住み、或は他家に寄食して春を鬻ぐ賣淫婦あるのみ、而かも此の如き者と雖最初より醜業を營むべく自ら進んで警察の認許を得たるに非ずして其大多數は數回密淫賣をなしたる結果、始めて警官に發見せられ已むを得ず警察の賣淫婦名簿に登錄せられたるものなり、故に獨逸にては之を强迫の記

入 Zwangsweise Einschreibung とは云ふなり、而して一旦其の姓名の登錄せられたる以上は、彼等は警察の監理の下に立ち一週に一回乃至二回自らが醫家若くは病院を訪ふて健康診斷を受けざるべからず、若し其際病毒あることを發見せらるゝ時は其全治するまで休業せざる可からず、されば此の如き賣笑婦は吾邦の所謂公娼とは全く其性質を異にするものと云ふ可く寧ろ警察管理の下に立てる私娼的賣笑婦と稱するを以て穩當とすべし。

以上說くが如き事情なるが故に、獨逸に於ける自由賣笑婦の輩は警察に發見せらるるを恐れ、其一旦、風俗警察の賣淫婦名簿に其姓名を記入せらるゝ時は檢黴の强行を受けざる可からざるのみならず將來結婚すること能はざる境遇に陷るを以て、巧みに警官の眼を晦まして醜業を働くなり、ブラシユコが其著書に於て、黴毒傳播の危險多き初回の賣淫婦、密賣淫、半賣笑婦等の全體は檢黴を受け居らずと云ひしは固より當然の理にして別に怪しむに足らず、而して彼等密賣淫婦の一度警官に檢擧せられ其の監督の下に立つに至れば、前述べたるが如く病院の强迫的檢黴を受くるを以て病毒發見せらるゝ場合には休業の已むなきに至り糊口に差支を生ずることゝなるが故に、彼等が其の疾病を隱蔽するに勉め從て恐るべき病毒を他に傳播するに至る

も亦た自然の勢なりと謂はざる可からず、是れ畢竟遊廓の制度なく、徒らに賣笑婦を散在せしめて自由に行動せしむるが爲め充分なる監督管理を行ふこゝと能はざるに因らずんばあらず、若しそれ吾邦の如く一局地遊廓を設けて賣笑婦を收容する集娼制度を行はゞ、彼等を充分に管理し、嚴密に黴檢を實施し得べく、從て病毒の傳播を著るしく減少し得べきなり、ブイアウが獨逸伯林に於ける娼婦四千人中、檢黴を受けたる者僅に五割に過ぎずと云ひしとの實に散娼制の缺陷の致す所のみ。

余輩の觀る所を以てすれば、吾邦に於ける遊廓制度は、賣笑婦の管理及び花柳病の豫防上最も適當なる施設なりと謂はざるを得ず、然るに獨逸等に於ては這般の制度なきを以て、賣笑婦は至る處横行濶步し、良家の夫人令孃の如き裝をなして男子に接近し、啻に風俗を亂すこと大なるのみならず病毒を蔓延するの度に至ても實に豫想外なるものあり、而して密賣笑婦に在ては唯警察官に發見せられたる者のみ風俗警察の賣笑婦名簿に記入せられて其の監督を受くるに過ぎず、而かも散娼制なるの故を以て嚴密に之を管理すること能はざる結果續々病毒を隱蔽する者を生じ、從て之を傳播すること愈〻劇烈となるに至る、されば、ブラシユコ、ブロッホ等の醫學者が花柳病の豫防上、寧ろ警察の監督を廢して之を放任するの勝れることを痛論するに至りし

も決して怪やしむに足らざるなり。

されば彼國に於ける賣笑婦の事情を知らずして直ちにブラシユコ、ブロッホ等の言ふ所を信じ之を我邦にも應用せんとするが如きは根本的に誤れりと言はざる可からず。博士が『獨逸諸專門家の說の如く、檢徵法があつても、それは形式に留り實際徵毒豫防の效力がないとすれば、公娼制度を採用すべき理由は根本より覆へさるゝ譯である』と云ひしは實に一を知て二を知らざる迂濶の說と稱すべし、我邦の公娼制度は國家の體面上議すべき點もあれども、花柳病の傳播を制限し、且つ一般風俗の墮落を防ぐの點に於ては遙かに歐洲の散娼制に優れり、敢て博士及び我邦の廢娼論者の一顧を煩さむ。

* * * * * * *

處女に關する法醫學

時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、凡て處女の純潔を尙ぶは一般國民の風習である。處女とは未だ異性の肉を解せざる未通女の謂ひで、其特徵とする所は科學上より論ずれば卽ち處女膜の存在である、此膜は陰腔の下部に緊張せる輪圓形或は半月樣の膜で腔孔を多少閉鎖してゐるものであるが、其性質比較的に韌靭で容易に破綻しないことは實驗上明らかで、例之ば處女が跳走し或は兩脚を開跨しても破裂することはない、而して之が始めて破裂するのは則ち新婚の夜で、其際多少の出血を伴ふものである、されば古代の猶太人の如き、此出血を以て純潔なる處女の確徵となし、血痕の附著せる新婚の寢衣を親族に示して之を誇るの風習があつた、此風は曾に東洋のみならず、亦た伊太利の如き歐洲の國にも行はれ、チアベル府にては新婚の夜に用ひたる寢衣を朋友間に示すことである。

此の如く處女の純潔を尊重するの風が古代より行はれてゐる故、立法家は無垢の處女を汚して其純潔を汚したるものに對しては特に嚴酷なる刑を科したものである猶太にては許嫁ある處女を犯したものは之を死刑に處し、古代の羅馬及び希臘の雅

典又た古代の英佛の法律にては同樣に死刑を宣告し、北米合衆國にては近世に至るまで同じく死を以て犯者を罰した。

然るに近世に至つては、處女に對する犯行の刑律は寛大になり、近時獨逸の刑法の如きは古代の法典に見えたる『處女』或は『破瓜』等の如き語なく、唯『交接』『猥褻行爲』等の字句あるを見るのみで、特に處女を犯したる罪を設けてゐない、併し普國一般訴訟法には特に『破瓜に對する賠償』を規定してあるから、處女の純潔と名譽とを毀損せるものに對しては、民事訴訟を起し、損害賠償を要求することが出來る。

自から處女と稱するものが、自己の純潔を汚され、名譽を傷けられたりとて訴て出づる場合は、多くは强姦に基づくものであるが、併し又た故意に虛僞の申立をなして、被告より金錢を貪ぼらんとし或は被告の名譽を陷れんと企つるものも鮮くない、曾てカスペルは十一歲の女兒が强姦の辱を受けたりと其母親の訴へたる事件に就き親しく其女兒を檢した所其の局部にも毫も損傷なく、唯淋疾を患ふてゐることを認めた故、更に被告の男子を調べてみたれど、淋疾を患ふることなく、却て黴毒に罹れるを發見し、女兒の現症を被告の疾病との全く相異れるを突き留め、之を以て僞訴と鑑定した、そこで裁判官は其原告たる母親を結問せしに、果たしてカスペルの鑑定通りで

あつた、卽ちその母親は貪慾俺くことを知らぬ惡婆で、大金を私する目的を以て故意に知人某をして其兒女を姦せしめ、之に淋疾を傳染せしめ、富豪某より强姦せられたと僞訴したことが明白となつた。

又たマシュカの世に報告したる强姦事件に於て、一處女の癲癇發作の際被告男子の爲に米穀倉庫內に運び入れられ、其處にて姦淫せられたりと申立てたが、直ちにその僞訴たることが看破せられた、それは何故であるかといふに、凡て癲癇の發作する際は、全く意識を失ひ、人事不省に陷るが常であるのに、右の處女は其の當時の事情を明らかに申立てたからである、これも全く被告より金錢を貪ぼらんが爲に虛僞の訴をなしたのであつた。

又たカスペルは姉の夫より姦淫せられたと訴へ出でし一處女を檢せしに毫も破瓜の徵を認めなかつたから嚴しく詰問した所、遂に姉の請に從ひ其夫と離緣せしめんとの目的より斯く僞訴に及んだことを白狀した、想ふに斯樣な實例は世上鮮なからざることであらう。

併し亦た他の一面に於ては、自己が依然處女たることを明らかにせんが爲に、法廷の審判を求むるが如きこともある、エンメルトの記載した所に依れば、鄕黨間に於て同

胞相姦通せりとの風評を耳にした故、其の無實無根なることゝ、自己の潔白とを證せんが爲め、法醫の診斷を求めた處女があつた、又たカスペルは六年半ヶ月以前に結婚した二十四歳の美人が、其夫に對して離婚訴訟を提起するに際し、未だ一回も同衾したることなき由を告げ、自己は依然たる處女であるから離婚せられたき旨申立てたが、之を檢して其の事實なることを認めた一實例を記述したことがある。

抑も處女の處女たる所以は、未だ男味を知らざるにある故、處女膜の存在が大に重要視せらるゝことは、冒頭既に論じたような次第であるが、併しこれは俗人間に行はる普通の考へであつて、處女膜の有無に依つて直ちに其處女たるや否やを決定することは出來ない、元來處女膜の韌靭で且つ腟口の比較的に廣濶なるものに在つては、假令一回男性に接しても必ずしも破綻するものでなく、尙ほ能く引き續いて異性の慾望を充たすことが出來ることがある、每夜幾多の嫖客に接する賣笑婦の輩にして往々完全なる處女膜を有してゐる者のあることは、ローゼンベルグ等の既に確證した所で、又たシュレーデルの如きは、既に妊娠せる婦人にして、尙ほ依然として處女膜を具備せるもの少なからざることを認め、クレーデは更に分娩を終りたる產婦に於ても之を見たことがある。

されば處女膜の存在すればとて之を以て直ちに處女なりと看做す譯にはゆかぬ、而して又た之を同時に處女膜の破綻缺損せるを見て直ちに非處女と斷定することも出來ぬ、何となれば先天性に處女膜の缺損し又たは外陰部腟部の疾病の爲めに自然に破綻することもあれば、又たフホデルベルロック等の說の如くに月經の際多少凝結せる血塊の爲めに破綻することもあるからである。

こゝで一寸述べて置かねばならぬことは、處女膜なるものゝ生理的意義である、換言すれば、如何なる自然の必要より特に處女膜の存在するものであるかと云ふことである。

元來人間體內に在る諸器關はそれ〴〵殊特の生理的機能を有するもので胃腸の食物を消化吸收し、肺臟の呼吸運動を營み、心臟の血液循環を司つてゐることは、何人も知つてゐる通りである、固とより人體內の器關の中にも所謂不完器關と云つて何等の機能をも負擔せざる者が無いでもない、例之ば男子の乳房を始めとし蟲樣突起、眼の半月樣皺襞(眼の內眥部に在る赤色の皺襞)、皮膚の毳毛等の如きものである、此等の器關は畢竟吾人の祖先動物より遺傳せられたもので、人間に在つては今や生活上殆ど效能なき退化物となり、從つて其の機能も消失して了つたものである、然らば處女

膜なる者も不完器關の一ではなからう乎と云ふに、決してそうでない、何となれば、人間に近き動物に就て調べてみるに毫も處女膜或は之に類似するものを認むることが出來ない。

ビショッフは類人猿に於て全く處女膜の存在せざることを證明し、デニケルは「ゴリラ」の胎兒幼兒に於ても之れなきことを記載し、ウイデルスハイムも猿に處女膜の無いことを明言した、是に由つて之を觀れば、處女膜は祖先動物より遺傳せられた不完器關に非ずして、人間に至つて始めて發生したる新器關なることが明らかである。

然らば處女膜は生理上如何なる效用目的を有するものであるかと云ふにどうも分らない、素とより社會的及び家族的生活に於ては處女膜の存在が純潔なる未通女の標徴と認められ道德上の方面に多大の意義を有してゐるが、其の生理的値價に至つては之を明らかにすることが出來ぬ、メチユニコッフの說きしが如く、處女膜は人間にとりて全く無要の一器關であるのみならず、時としては有害の影響を及ぼすことがある、此膜の比較的に靱韌で抵抗力の强いものに於ては、破瓜の際屢、外陰部の損傷を生じ、又た此膜の血管に富めるものに於ては、多大の出血を來たして之が爲めに往往死するに至るが如き不慮の轉歸を取ることがある。

其他處女膜が月經時に於て子宮より流出さる血液の排泄を妨碍し、其の一部を腟腔內に抑留する故、種々の「バクテリア」が此の腟內に殘留せる血液內に發育して之を腐敗分解することがある、メチユニコッフの說に依れば、妙齡の處女に發生する萎黃病の如き貧血病は此樣な原因に基くのであらうと云つてゐる、蓋し萎黃病に對して結婚の最も良好なる效果を奏するのは、處女膜の破綻する結果腟內の血液を善く排泄するに至るに因るのではなからうか。

處女膜存在の生理的意義價値は全く不明であるとしても、之が處女の標徴として社會的生活と道德的方面とに意義を有してゐる故、歐米に於ける妙齡の女子は其處女膜の保在に對して非常の注意を拂ひ月經時に際しても、つめ紙や「タンポン」等を腟內に插入することはなく、唯外陰部に一定の處置を施して置くだけである、此の如き次第である故、歐米の女子に在つては、第一回の交接に因つて始めて破裂することが甚だ多く、デヘルヂーが千人中九百九十九人までは交接に因つて其の處女膜の破裂を來たすものであると云つたのは、蓋し實際の事實である、而して其の破裂する所は血管に乏しい遊離緣であるから、出血は少量なるが常である併し稀には腟の後壁にまで破裂して强き出血を來たし、遂には外科的手術を施すの已むを得ざるに至ること

がある。

されば處女膜の既に破裂せるものは異性に接觸せし者其大部分を占むと云ふても差支はない、勿論眞の處女にして陰部の外傷又たは疾病の爲めに其膜を失ふことも あるが、併し此の如き形跡を認むること能はざる者にして破綻せる時は、十目の視る所非處女と認定せざるを得ない。

所が我國の女子は歐洲の女子のように處女膜の大切なることを知らぬ故月經時に於ける處置が亂雜粗暴に流れ、之が爲めに偶然處女膜の破綻を來たすことがある、されば我國に於ける青春期の處女に於ては、如何なる者にも處女膜を認め得ることは出來ないであらうと思はれる、從つて其の有無に由つて未通女なるや否やを判斷することも出來ぬ場合が多いであらうと信じられる。

世俗の人の中には、薔薇の赤き如き脣、あざやかなに輝ける眼の光を以て處女の一徴としてゐるものもあるが、併し此の如き外貌は個人に由つて差異のあるものである故、毫も確徴とするに足らぬ、又た破瓜の後頸部が腫大するといへる古代羅馬人の俗說の如きは、固とより一笑に附すべきものである。

最後に一言すべきことは、女子自から行ふ所の非自然的所爲に因つて處女膜の破綻

するや否やの問題である素とより其の方法が粗暴に失する場合には破綻することは論を待たざる所であるが、實際上に於ける方法より推測を下してみると、之が爲めに破裂することは恐らくは甚だ稀有であらうと思はれる、現にホフマンの如きは非自然的行爲に耽りたる女兒に於て處女膜の異常なきことを論じ又たジョンソン、ベーレンドも其の損傷を見ることの稀有なることを認めたことがある。

* * * * * * * * *

性慾倒錯者としてのルーソー

ジャン、ジャック、ルーソーといへば人の知るが如く、佛國革命の導火となつた民約論の著者として有名なる人である、されど此人が一種狂的の人物であつたことは、其自

傳たる『懺悔錄』Confessions（千七百六十五年發行）に徵して明かな次第であるが自分共が特に興味を感ずるのは、ルーソーが少年時代に於て性慾倒錯の徵候をあらはして居つたことである。

渠の著『懺悔錄』中、年齡八歲の頃牧師ラムベルシエーの家に在りし條に曰く

ラムベルシエーの娘は予を愛すること慈母の如くであつた、されば又た母の子に於けるが如くに予に嚴罰をしたこともある、初め鞭韃の語を以て予を威嚇した時は大に恐怖の念を抱いたが、一旦鞭苦せられた後は其痛苦の豫想の如くに甚だしからざることを感じた、而して此の鞭苦は予をして牧師の娘を恨むの心を生せしめざりしのみならず、却て予をして之を愛慕するの情を起さしたのである、予は此刑罰を受くるを好むが爲め故意に惡戲をなした、それは鞭苦に因て受くる痛苦と慚愧とが必ず一種の快感を誘起するからであつて、此快感を得んとするの願は彼の痛苦と慚愧を受くるの嫌よりも大であつた。

當時八歲の兒童たりし予に與へたる三十歲の處女の鞭苦は、永く予の爲めに特異なる性を定めた、予の性質は實に此の呵責に依て奇異なる方向に發達した、予の性慾は途に迷ひ、嘗て受けたる鞭苦の快には復た他の快を求めなかつた、予は久しく

不識の慾の爲めに困められ、窈窕たる美人を見る毎に、予の心裡にはラムベルシエーの娘の姿を想像し之をして斷へず予を鞭苦せしめた。

以上の記事に徵すれば、ルーソーは慥かに「マソキスムス」Masochismus に罹つてゐたのである、「マソキスムス」とは異性の人より毆打せられ或は凌辱せられ始めて快感を覺ゆる一種の性慾倒錯症の謂ひで、其中特に臀部を毆打せらるに由て快感を發するものは「フラゲルラント」といふのであるがルーソーは實にこれであつた、精神病學の大家クラフトエビングは其著『プシコパチア、セキスアリス』Pychopatia sexulalis の性慾生理篇に於て說て曰く「臀部の毆打に因て起る所の知覺神經の刺戟はよく性慾を發動せしむ、兒童の臀部に受けたる鞭苦に因て性慾始めて萌し遂に手淫の惡習に陷ることは意想外に多し、敎育家たるもの之を記せよ」とある。

ルーソーは右說いた如く「マソキスムス」のみでなく、又た他の性慾異常をも示した、それは同じく『懺悔錄』中渠がトリユーランのポー街の宿屋に居つた條下の記事を見ても明らかである。

予の性慾は、愈〻盛んとなつたが、之れを遂行する機會がなかつた故、或奇異なる手段を以て益々之を刺戟した、予は暗黑なる並木又たは僻地を選んで遙かに行路の婦

人を望み、心中、斯くの如くにして渠の傍に在らばやと思ふ一種猥褻なる態度をなした、婦人の見る所は予の猥褻なる態度に非ずして寧ろ其滑稽なる態度であつた、併し婦人をして之を目擊せしめた予の馬鹿らしき快感は實に譬ふるにものもない程であつた、若し予に膽力があつて猥褻なる行爲を婦女子の通路に演ずることが出來たならば、或は大膽なる淫婦があつて、予の慾情を遂げしめたかも知れなかつたのである。

一日、予は庭後の暗き所に佇立した、此所には井戸があつて、其家の下婢が水を汲むべく屢、此所に來ることを知つてゐた、で、此所より戸を排して進むと、迂回せる歩廊を經て窖裏に達することが出來る、予は此の歩廊の暗くして且つ長いのを見て、之に遁げ隱れたならば發覺せらるゝの憂ひなしと思ひ、心之を恃みて下婢の井戸に近き來る時を窺ひ、彼の猥褻といはんよりも寧ろ滑稽なる喜劇を演じた下婢の中でも怜悧な者は見て見ぬ振りをしたが、稍痴鈍な者は之を笑ひ、一層馬鹿なものは侮辱を受けたと思ひ大聲を發して予を罵つた、予は身を抽で廊裡に躍入し、暗所に向て遁げ隱れた、追跡者の中には男子の聲もあつて予に戒心を促した云々。

此一節は婉曲の筆を以て記載してあるが、自分共の如き科學者の眼から觀ると、其の

「エキスヒビチオニスムス」Exhibitionismusなることが直ちに看破せられる、それは如何なる性慾倒錯なるかを云ふに、公衆殊に女子の前で恥部を露出して一種の快感を覺ゆる所の異常症である、ルーソーが前記の一節に於て『猥褻なるよりは寧ろ滑稽なる喜劇』と言つたのは卽ちこの事である、クラフトエビングの說に、此の「エキスヒビチオニスムス」は腦脊髓病を併發せる精神薄弱者、癲癇病者、神經衰弱症患者、重症の遺傳を有する發作性衝動症の患者に來るといふことである、世上往々公衆の面前に於て故意に恥部を暴露した廉に由て猥褻罪に問はるゝ者の多數は實に這般の性慾異常症であることを忘れてはならぬ。

噫、民約論の著者として、歐洲各國に自由思想を傳播し、佛國革命を惹起せしめたジャンジャック、ルーソーは、實に上記の如き色情狂者であつたのである。

* * * * * * *

心臟麻痹

醫家の其筋に提供する死亡證書には死因を心臟麻痹に歸するもの、今日に於ても尙ほ尠からざるを見る、是れ果して其當を得たるものと云ふを得べきか、蓋し「心臟麻痹」なる名目は嘗て第三回國際醫學會々議に於て議決せられたる死因表中には之を見ることを得ず、唯獨り吾邦の醫界に於てのみ使用せらるゝに過ぎざるなり、然るに官廳は之を許して怪まず醫家亦た平然として之を濫用す、何等の失當ぞや、吾人の玆に一言せざる能はざる所以なり。

夫れ死の由て來るの原因や實に多般なりと雖、要するに、心肺腦の三臟器の直接又たは間接に障碍を受けて其官能の廢絕するに基かずんばあらず、されば、古人は此三臟器を目して「死門」とは稱しぬ、而して死門となること最も多きは心臟なり、ノートナーゲル曰く人は殆ど常に心臟より死す Der Mensch stirbt fast immer von dem Herzen aus と、然ども心臟より死する原因に至ては實に種々にして或は心臟の解剖的變化或は其官能障碍を惹起して致死せしむる原因實に僂指するに暇あらざるなり、されば、醫家

たるものは其診斷の精を期せんが爲めには必ずや心臟障碍の由て來りたる原因機轉を究めざるべからず、斯の如くにして始めて眞の死因を明にするを得べし、唯漫然、心臟麻痹其者を以て直ちに死因となすが如きは、學問上何等の價値をも有せざるなり、心臟の尙ほ鼓動を止めず血液を循環せしむる以上は何ぞ死あらんや、死の來る實に心臟の官能の廢絕すればなり、此の如きは醫學の素養なき素人と雖知る所に非ずや然るに堂々たる醫家にして死因を直ちに心臟麻痹に歸したり而して之を惹起する眞の死因を擧げざるは、診斷上責任を蔑視するものと非難せられても之に對して果たして何の答辭かある。

若しそれ一歩を進めて論ぜんか、心臟麻痹其者は必ずしも死因にあらずして却て死せんが爲めに起る所の現象なりとも云ひ得べし、コーンハイムの說に依れば、人の將さに死せんとするや、心左室先づ麻痹するも、右室は尙ほ若干時間運動を持續するが故に肺循環區域には鬱血を來たし、次で肺水腫を發起す、肺水腫の瀕死時に起る變化なることは既知の事實なり、コーンハイム曰く人は肺水腫を得るが爲めに死するに非ず、却て將さに死せんが爲めに肺水腫を得るなり Die Menschen sterben nicht, weil sie Lungenoedem bekommen, sondern bekommen Lungenoedem, weil sie im Begriff sind zu sterben. と、さ

れば心臓麻痺は將に死亡せんとする際の狀態にして之を以て直ちに死因となすが如きは決して其當を得たりと云ふべからず。

夫れ死因を記するに當ては須らく心臓障碍を致すべき病的變化を指示せざるべからず例之ば、脚氣にて死するは主として横隔膜神經の麻痺に因り、實布的里にて死するは窒息或は心臓實質炎又たは運動刺戟傳導系統たるヒス氏束の變性(アダム、ストーク氏症候簇)に基き、腸窒扶斯にて死するは腸出血、穿孔性腹膜炎は心臓實質炎、或は肺炎に因るが如く各般の疾病より心臓官能の障碍廢絶を來たすには必ずや之が原因あり、而して此原因こそ則ち眞の死因たらざるべからず然るに臨牀上之を究めずして直ちに心臓麻痺を死因となす、談何ぞ容易なる。

是を要するに、心臓麻痺の如き漠然として其の眞相を捕捉すること能はざる名目は須らく死因表より除去せざるべからず、是れ吾人の玆に一言を費して醫家の猛省を請ふ所以なり。

* * * * * * *

手帖より

○醫法を說ける佛經

佛陀の說きし敎のうちには、醫事治病のことも尠からず、今之に關係ある經典の名を擧ぐれば左の如し

佛敎胞胎經　涅槃經の現病品　法華經の藥草喩品　藥師如來本願經　藥師瑠璃如來本願功德經　佛說了本生死經　佛說溫室洗浴衆僧經　長壽王經　佛說呪時氣病經　佛說呪齒經　佛說呪小兒經　治禪病祕要經　佛說捺女耆域因緣經　佛說捺女耆婆經　佛說療痔病經　囉拏說救療小兒疾病經　佛說醫喩經　能淨一切眼病陀羅尼經　佛說佛醫經　維摩經問疾品

素とより右擧げたる經典のうちには後人の僞作もあるべし。

○二三病名の語源

○ Typhus（窒扶斯）希臘語にて蒸發氣、霧の意なり、精神朦朧となるを以て此名あり

○ Diphtherie（實布的里）希臘語にして皮の意

○ Syphilis（黴毒）同じく希臘語にて豚を愛するの意なり、千五百二十一年の頃フラカストーロと云へる人の作りし詩の中に一人の牧畜者ありて黴毒に罹りしことを詠めり、而て此人の名を「シフヒリス」と云ひしより、黴毒の病名となすに至れりと傳ふ

○ Schwarzer Tod（黒死病）死體の黒色となるに因て此名を附せりと思ふものあれども、誤なり、黒とは元來不明の意にして黒死病とは則ち死因不明の病との意なり、化學のことを獨逸語にて Schwarze Kunst（黒術）といふ、又た黒は祕或は奇の意あり余の獨逸に在りし際、一日 Die Geheimnisse des schwarzen Hauses と題せる見世物小屋の看板を見しことありしが、これも『黒き家の祕密』にはあらずして『奇なる家又たは譯のわからぬ家の祕密』と讀むべきものなるべし。

○ Epilepsie（癲癇）襲はるゝの意

○ Eklampsie（子癇）俄かに現るゝの意

○ Athetosis 固定位置なしとの意

○女醫

女醫は往昔よりありき、希臘大古のソクラテス時代にも產科に妙を得たりしフエナレーテといへる女醫ありしといふ、中古時代伊太利の一時學問の隆盛を極むるや多くの女醫あらはれて、其中には大學教授となりたるものもありき、解剖學者にはギリアニ、マンツオリニーの女醫あり小兒科教授にはペトラチナ、外科教授にはペレッチーといへる女醫ありしと、素晴らしき勢ひなりし哉、二十世紀の現代はいづれ晩かれ早かれ男子を凌駕すべき卓拔俊秀の女醫學者を出だし、博士となり大學教授となるものも追ひ〳〵現るゝことなるべし、されど、あまり當てにはならざるなり、噫。

○學者

學者といふもの傲然自から高く標榜し、世人を眼下に視くだして俗人と笑ひ、馬鹿者と嘲る、されど俗人や馬鹿者のあればこそ學者は威張てゆかれ、生活することも出來るなれ、世人が皆一樣に賢くなり物識りとならば、學者の存在を要せぬことゝなるべし、獨逸の俚諺に曰く學者は世間の馬鹿者で飯を食ふ Gelehrte leben von Thoren と。

○惡習

日本人の獻酬と洋人の接吻とは東西好一對の惡しき風習なり、ことに接吻を以て甚だしとなす、洋人のうちにても露國人は取りわけ接吻を好むの風ありされば獨逸人

は之を嘲笑して曰く露人は接吻屋なり Die Russen sind Kussleute と、されど、余等が見たる所にては獨逸人にも接吻の風隨分盛んなるが如し、噫誰れか烏(カラス)の雌雄を知らんや。

手帖より

○生命

地球上に住める十五億人の中、毎年死亡する數は平均三千萬人なり、されば、毎日人間の死する數は凡そ八萬人の割合なりとす、而て人壽百歳に達せず、其半にだに到らずして死する者の多きは、生存競爭の劇烈にして之が爲めに身心を過勞すると、生の苦痛をしばしなりとも忘れて刹那の快を求めんとの心より酒料を濫用し又た女色を漁してデカタン的生活をなすと、交通の便開けて病毒の蔓延を助長する等其の主要の原因なるべし、デルリンゲル Doellinger が『人間は死せず、自から殺すなり』Die Menschen sterben nicht, sie töten sich といひしは實に近世の狀態を道破したる言なり、されば吾人にして、長壽に達せんと欲せば須らく生命を短縮する諸般の有害性原因を避ける樣に努めざるべからず『生命を延長する眞の術は生命を短縮せしめざることにあり Die wahre Kunst, das menschliche Leben zu verlängern besteht darin, dass wir es nicht verkürzen と或衞生學者のいひしこそ實に肯綮に中れりと謂ふべけれ。

○衣食

手帖より

吾國民の生活をつなぐ衣食の原料中には、外國より輸入せられたる者實に尠からず、衣服の原料として平民社會に專用せらるゝ木綿の種子は、文祿年代に於て當時南蠻と稱せられたる葡萄牙人の九州に輸入せしものにて、それより以來、吾國民は高價なる絹布及び粗剛にして肌に佳ならざる麻布を退け、廉價にして而かも體に佳なる綿布を歡迎することゝなりしなり、今日食品を調和するに用ゆる砂糖も德川八代將軍の頃までは支那より輸入せしものにして、甘蔗を植ゑて砂糖を製するやうになりしは、其後のことなり、甘薯は其始め琉球より薩摩に輸入せられしものにて最も甘き食品として國民の嗜む所となり、今や津々浦々殆ど到る所として燒芋の存せざるなきに至れり、又た馬鈴薯も海外より入りしものにて明和年間甲州の代官中井清太郎の繁殖を奬勵せしより諸國に傳り、天保の大饑饉には飛驒の人民をして餓死を免れしめたり、又た料理法のうちにも外國より傳へたりと思るゝものあり、所謂鳴南蠻といひ、葱南蠻といふが如きは其の語の自から證するが如く南蠻國と稱せられたる葡萄牙人(又たは西班牙人より傳へられたるものなるべし、其他吾人が今日にても雨を防ぐに用ゆる合羽(カッパ)なるものは新井君美の說に依れば、南蠻國の宣敎師の法服を模造したるものなりといへり。(山路愛山著武家時代史論に據る)

○蠻風

難波の葦も伊勢の濱荻、所變れば、物の名もかはるが如く、風俗も亦た國を異にするに從て同じからず、ことに千萬里の遠きを隔てたる歐洲の風俗が吾邦のに比して著しき差異あるは言はでものことなれども其中には我等の眼より見ていかにも蠻風とより他に見られざるものあり。

先づ第一に擧ぐべきは接吻なり、これに就ては前にも一寸記し置きしが、元來接吻は犬や猫の如き動物の好む所なり、されば、洋人は犬猫の亞流ともいふべき歟、ことに衆人の前に於て男女相擁して口を舐め合ひ、恬乎として恥づる色なきが如き、我々日本人の眼より見れば、醜くき限りとや云はむ滑稽とやいはむ、又た、洋人は肉體を露出するを以て野蠻の風習なりといひながら、夜會には美裝せる淑女が、眞白き胸と膊とを露はして得意氣に立ち振り舞へるは、自家撞著とこそ謂ふべけれ、支那婦人の纏足を以て蠻風と笑へる歐人が、其の妻女の不衞生きはまれる「コルセット」を裝ふを咎めずして、腰の細く臀の大なるを愛するは心得難きことなり、鳥の羽毛を戴き珠玉を聯ね、貝殼を纏ふて頸腕を飾るは古今の野蠻人に通ずる風習なり、然るに文明を以て誇れる歐洲婦人が亞弗利加の內地より美麗なる羽毛を求めて其の帽を飾り、印度の海島

より異彩ある眞珠を輸して其の頸に纏ひ、蠻人同樣の裝飾をなして得意然たるは豈に慣笑せざるを得んや、されば、夙に男女同權の論を唱へし、ジョン、スチユアルト、ミルも女子に一層教育を與へて、其の羽毛珠玉を珍重するの性情を除去せざるべからずと述べしことありき、神州の女子が歐洲の蠻風を以て美風と思ひ誤り洋裝せざれば、文明國婦人の仲間入の出來ざるものゝ如くに思へるは實に飛んでもなき心得違ひと云ふべし。

歐人の食物料理法も蠻的なるが多し、彼の「ビフステーク」に生血の滲み出づるを好むが如き或は豚の子供を丸燒にして食卓に上すが如き、何たる蠻風ぞや、美的料理を嗜好する吾々日本人は一見食慾の消失せざるを得ざるなり、而して彼等歐人の獸性なる、生血の滲み出る肉や豚の丸燒を好むに留まらず牛豚の腎臟腦髓までも啖ひ、甚だしきは陰莖をも食するに至ては、吾人嘔吐せざらんと欲すと雖豈にそれ得べけんや、聞く、佛國人は蛙を奢侈品の一に數へて之を貴び喰ふと、これ實に汚穢なる支那人の炬蝓(ナメクジリ)を食し、「カルン」人の蝦蟇、蛇を嗜むの類のみ、噫。

○豈所見を變せんや

醫士の病牀に臨むや、猶ほ軍人の戰場に臨むが如し、初めより確固たる治療上の方針

を定め直往驀進決して左顧右視するが如き優柔不斷の所爲あるべからず、昔者、古方家の名醫吉益東洞の長子痘を患ふ、其症險惡なり、紫圓を以て之を攻む、遂に起たず、二女亦た病む、尙ほ紫圓を與ふ、或人東洞を諫めて曰く、長子の起たざる人皆攻むるに過ぐるを識る、而て又た之を用ゆ、萬一變あらば、悔ゆるなきを得んやと、東洞曰く、方證相對す、之を服して死するは命なり、豈、毀譽に拘はりて其所見を變せんやと、固く執て動かざりしといふ、其の所見の確固たる、實に景仰すべきものあるに非ずや、彼の徒らに患家の機嫌を伺ひ或は世間の毀譽を意にし或は病症を制するの道を解せずして屢、治療の方針を變じ處方を書き換ゆること反復常なきの輩須らく愧死すべきなり。

○噫、水尾博士

我邦眼科學界の驍將水尾源太郎博士、腦出血に罹りて忽焉世を去りましぬ、あはれ十年以來銀海を照らしゝ明星の光再び仰ぐ能はざるか。伊丹の里にゐましける頃、暇ある毎に釣絲を垂れたまひし猪名川の水のみ今は空しく流れて、どこしへに行くうたかたの消えては浮ぶ夢の跡こそ悲しくもまた詫びしけれ。

朝顏のあしたの色ばかりなる果敢なさよりも尙ほ一しほ果敢なかりしは君が命なりき、昨日まで、いとすこやかにして樂しげに語り給ひし君の今日はあへなくも野邊

の煙と消えまさんとは神ならぬ身のいかで知り得べき、おのれ、君の訃を聞くや、あまりの意外に一たびは夢かと思ひ、二たびは僞ならんかとも疑ひしが、愈、そのまことなること能はざりき、あはれ、君の英魂今いづくにかおはす、駒にものして死出の山路をや越えたまひし、はた、舟に掉して渡り川をや過ぎたまひし、黃昏、風冷やかにして夕露人の袂を濕ほし、暗雲月を掠めて走る時君を思ふて悵然たるもの豈に獨りおのれのみならむや。（水尾博士逝去の翌日記す）

○水尾君の逝去を聞きし折詠めるかうちに

ぬばたまの夢かと思ひかへしても
さめぬを見れば、現なるらむ
悲しともいはれざりけりぬば玉の
夢にゆめみる心地のみして

○棺前に通夜しける時

なき君の棺のまへにひれ伏して
心のまゝに泣くよしもかな

しろ銀の海にひそめるましら玉
ひろはむ君は世にあらずして
うしと云ひ悲しといひて君がこと
語りあひつゝ明かす夜半かな
○君の遺子四人あり、みな幼なり
かたみにと、君が殘せる若草に
涙の露ぞ先づかゝりける

醫事一夕話

終

大正二年八月二十日印刷
大正二年八月廿日發行

價金壹圓拾錢

著者　田中祐吉
發行者　東京市本郷區龍岡町三十四番地　田中增藏
印刷者　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　今井甚太郎
印刷所　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　杏林舍

不許複製

醫事一夕話

發行所　東京市本郷區龍岡町三十四番地　吐鳳堂書店
振替口座東京四〇九五番
電話下谷一六七二番
四〇七九番

弘通書林

東京市本郷區切通坂町　南江堂書店
同　同區春木町二丁目　半田屋書店
同　同區切通坂町　金原商店
同　神田區通新石町　朝香屋書店
同　本郷區春木町三丁目　南江堂支店
同　同區龍岡町　朝陽堂書店
同　同區本富士町　明文館書店
同　同　文光堂書店
同　同區龍岡町　豐文堂書店
同　同區龍岡町　南山堂書店
同　同區切通坂町　根津書店
同　同區切通坂町　宮澤書店
名古屋市中區榮町　丸善書店
京都市寺町通二條下　若林茂一郎
京都市下京區三條通寺町　南江堂出張所
京都市三條通數屋町　丸善株式會社支社
京都市河原町　大黑屋書鋪
大阪市中ノ島玉江町　角屋書店
岡山市內山下　渡邊泰山舍
岡山市東中山下　文江堂書店
熊本市新二丁目　長崎次郎
熊本市洗馬町　長崎喜廣
長崎市引地町　芹川集榮堂
金澤市片町　安中宇都宮書店
仙臺市新傳馬町　金英堂書店
新潟市古町　萬松堂支店

關西大賣捌所
大阪市南區心齋橋筋一丁目　松村九兵衛
大阪市東區心齋橋筋博勞町　丸善株式會社支社

岡山醫學士立神正夫著

醫師開業術

四六判假綴　正價金九拾錢　郵税金六錢

「醫門の雀羅」あゝ何たる寂寞の光景ぞや。必しも學識の足らざるにあらず、經驗の乏しきにあらず設備の完からざるにあらず、而もこの淋しき光景の中に裏まれて不遇を嘆ずる醫師尠からず、蛟龍空しく池中に斃る、豈、淺ましからずや。

騰蛇は足なくして飛び、梧鼠は五枝にして窮すとゝいや運を天に歸するは愚也、而も古來「開業術」は醫業の秘密として永へに閉されたり、豈嘆ずべからずや。

著者は今や天下の秘密「醫術開業」を解くに當り、多年の經驗と鋭利なる觀察とを以て、能く社會の眞相を穿ち、開業醫の内情を露き、之れに穩健なる斷制を與へて餘蘊なし、加ふるに行文流麗にして波瀾檎縱、寔に近代の快著たるを失はず。

開業醫諸君は、採て以て座右の顧問たらしむべく、開業の未來を有する人に向つては無二の指針たるべく正しく諸君の要求を充すべきを信じ、敢て本書を醫界に提供す。

47

60
336

終